

# 月と花

しらたま\_1213

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは風太郎と五つ子の姉妹、そしてもう一人の主人公が繰り広げる物語

オリ主の作品です。

原作読了済

先に言いますがオリ主×一花の予定です!!

初めてラブコメで感動した作品なので作ってみました

基本は原作通りに進んで行く予定なのでもしかしたらアニメでカットしてる部分や順番通りじゃないシーンもあるかと思いますがそこはご了承ください!

初めてで読みずらく所々疑問もあるかと思いますがよろしくお願ひします!!!

# 目次

設定&あらすじ	1
最悪の出会い	6
家庭教師として再会	22
五人の問題児	42
それぞれの家族	71
屋上の告白	89

# 設定&あらすじ

## 設定

主人公：如月翼

身長：175cm

体重：55kg

血液型：O型

好きな食べ物は焼肉

嫌いな食べ物はトマト

髪は少し長く前髪は目元にかかるくらいのセンターパート

制服は第1ボタンを外しているが本人曰く至って真面目

勉強は英語と数学は得意だが他は50点台

風太郎とは小学で友達となり中学は別になった。

高校で再開し友達の関係を築けている。

中学はサッカー部だったが怪我などもあり部活をやめ高校は特に部活などはして  
なく暇な時にバイトを入れている。

性格は風太郎ほど頑固ではないが友達を作ることに関してはあまり好まない。

風太郎以外の友達はいないと考えてよい。

人間は裏切る行為をする生き物であり自分が得をするならなんでもすると思っ込んで入る。

風太郎とはまた別の頑固さが出ている。

だが人に頼まれたらなかなか断れない

家族は母親と一緒に住んでいる。

父は幼い頃に離婚し他界。

らいはちゃんとは小学生の時に風太郎と一緒に遊んだことがあるので面識はある。たまに遊んでもらっている。

今はその設定で行き今後の展開で追加していきます！

それではどうぞ←←←

「起きてください 新婦様のご準備が整いましたよ」

新郎様の上杉風太郎は女性スタッフに起こされる。

風「……………あ」

翼「あ、やっと起きたな」

風「……悪い、結構寝てたか？」

翼「それはそれはもうぐーっすり寝てましたよ？」

風「お前なあ……起こしてくれよな」

翼「だつて気持ちよさそうに寝てたからなく起こすのも勿体ないじゃん？」

「式の準備で疲れてるかもしれないけど本番前に寝ちやうとは相当疲れてるんだね？」

風「つたく……お前、あいつに似てきたんじやね？」

翼「っ！／＼／＼……確かにそうかもな」

「あいつに出会ってなかったらもしかしたら今の自分になってないかもな」

風「お前ももうすぐ式が来るんだろ？」

翼「まあね。」

「ふふっ 私は式の準備に戻りますね」

風「あ！すみません！起こしてもらって」

「いえいえ、それでは失礼します」

そう言つて女性スタツフは部屋から出ていく。

風「やっぱあれは夢か」

翼「?なんの事だ?」

風「さっきの夢、あいつらに初めて会った夢を見た」

翼「え!?!まじ?あの日か?」

風「まじだよ、ほんと最悪な夢を見ちまった」

翼「あゝゝ確かに、お前にとっては悪夢のような日だよな」

風「ほんとだよ」

翼「それにしても清々しいんじゃない?」

風「まあな、俺にとってもあいつらに出会わなかったら今の俺はこんな所に居ないかな」

翼「ちゃんとあいつの事支えろよゝゝ?」

風「うるせえな!言われなくたってわかってるよ」

「あいつは昔から無理をするからな、俺が支えないといけない…けど」

翼「けど?」

風「俺もあいつに支えてもらったから今後はお互いに支えながらやっていきたい」

翼「そうか」

「そう俺は兎も角、風太郎にとってはあの日は悪夢のような日でありここが原点であった日」



夢を見ていた  
君と出会った高校2年生の日  
あの夢のような日の夢を

## 最悪の出会い

とある高校2年の夏休み明けの日

風太郎と翼は学食で昼食を取ろうとした

翼「風太郎、この社会の答えなんだけど……」

風「ああ、この問題はな……」

俺と風太郎は授業でやった小テストを見直ししていた……まあ風太郎は必要ないと思うが

翼「風太郎は相変わらず満点か、なんでいつもそんな点数とれるんだ？」

風太郎「特にそれといったことはやっていないぞ？ただ復習して望んでいるだけだからな」

翼「（その復習が異常だと思うんだよな……）」

そして食堂に着きお互いにいつものを頼む。

翼「焼肉定食で」風「焼肉定食焼肉抜きで」

二人は一緒のようで違う物を頼む。

翼「毎回思ったんだけど風太郎って焼肉食べた事あるの？」

風 「あんな豪華な食事には勿体ないからな」

「それにこっちの方が一番安いし味噌汁とお新香付だからな！水も飲み放題！」

翼 「(やっぱこいつは頭が拗れているな……)」

「(たまには自分のご褒美で頼んでもいいのに……)」

「(しようがないな……)」

翼 「俺の焼肉半分あげるよ」

風 「え？いいのか？」

翼 「今日の小テストの満点と俺に復習を手伝ってくれたお礼だと思っ方がいいよ」

風 「ありがとう！おお！俺の食事が豪華になっっていく!!」

翼 「(ただ焼肉置いただけなんだけどな……)」

そんなやりとりがありながら風太郎達にとってはいつも座っている食堂の席に着こうとした。

その時。

風 「!!」五月「!!」

風太郎と知らない女子生徒が同タイミングで座ろうとしていた。

翼 「(?あの制服……転校生か?)」

五月 「あの！」

「私の方が先でした、隣の席が空いてるので移ってください！」

風「は？ここは毎日俺達が座ってる席だ、あんたが移れ」

翼「ちよつおい！俺は別にいいから！」

五月「関係ありません！早い者勝ちです！」

風太郎と女子生徒は睨み合いどちらも一歩も引かない状況になっている。

翼「(どつちも頑固だな…俺が仲裁に入るか…:~)」

翼「風太郎、俺はいいから。俺が隣の席に座る。」

風「翼!?!でも！」

翼「それで風太郎が反対側に座る、君もそれでいいよね？」

五月「そうですね…すみませんご迷惑をおかけてしまつて」

翼「いや、大丈夫だよ。それにこれ以上騒ぎになるのは御免だからね」

五月「すみません…」

風「翼、俺は別にお前のことを思つて」

翼「だとしてもだ。はあ…今日はこれで我慢してくれ」

風「あ…:~:~ 分かつたよ。」

翼は風太郎に対し叱りつつも最後は笑顔を見せ「今日はしょうがないよ」と思わせて

事を済ませる。

風太郎と女子生徒と俺でそれぞれ食事をする中女子生徒から言葉が発する。

五月「！行儀が悪いですよ」

風「何？「ながら見」してた二宮金次郎は称えられたのに俺は怒られるの？」

五月「状況が違います！」

翼「俺も同感」

女子生徒は風太郎を睨み翼はジト目で風太郎に対し言い放つ

風「テストの復習をしてるんだ。ほつといてくれ」

五月「へえ？？食事中に勉強なんて……余程追い込まれているんですね？」

「何点だったんですか？」

女子生徒は今日の授業で行った風太郎の小テストを本人から奪い取る。

風「あ、おい！見るな！」

翼「やばっ！」

五月「えく……上杉風太郎くん、得点は………!？」

「100点!？」

風「あーめつちや恥ずかしい！」

五月「んんん!!!」

翼「あくまたやつちやつたよ」

風太郎はわざとテストを見せ女子生徒に小馬鹿する。風太郎はテストを誰かに見られるとお決まりにこの行動をする。

翼「つたく…いい加減それやめろよ…」

五月「わざと見せましたね!」

風「なんのことだか」

五月「うう…悔しいですが勉強は得意でないので羨ましいです…」

翼「え? そうなの?」

五月「ええ…こればかりは認めざるを得ません…」

翼「そっか… (俺は風太郎のおかげで苦手な教科もなんとかなってるから運が良かったのかもな)」

五月「そうです!!」「私良いこと思いつきました!!」

翼「?」

五月「せっかく相席になったんです!」「勉強教えてくださいよ!」

翼「確かに! お前勉強得意じゃん! 学年トップだしせっかくだから教えてあげたら?」

五月「え!? そうなのですか!」

翼「そうそう! しかも今まで1位から落ちたこと1回もない」

「俺はこいつにいつも助けられてる」

五月「そうなんですネ！是非教えてく」

女子生徒は勉強が得意でない事を認めつつ風太郎に提案を求めると……だが

風「ごちそうさまでした」

五月「ええっ!?!」

翼「ちよっ！おい!?!」

風太郎は女子生徒の提案を無視するかのように席から立ち上がる

五月「食べるの早っ……」

翼「風太郎！いいのかわよ？」

風「俺は自分の事で忙しいからな。それに翼以外に勉強を教えるつもりはない」

翼「だからって……」

風太郎は理由を言い放ち立ち去ろうとする。

五月「ちよっと待っててください！」

風「なんだ？」

五月「あなたが教えてくれないのなら仕方ありません。ただ……」

「……お昼ご飯それっぽっちでいいのですか？よろしければ私の分も少し分けましょうか？」

風「いいや、満腹だね」

「むしろ、あんたが頼みすぎなんだよ」

「太るぞ」

五月「!!ふとっ…」

翼「なっ！（あいつデリカシー無すぎだろ!?!）」

風太郎は彼女に対しそう言い放ち食堂から立ち去った。

五月「全く!!なんなんですかあの人は!!」

翼「ま、まあまあ落ち着いて！あいつめつちや弄れてるけど悪いやつじゃないからさ！ね？」

「(つたく… 風太郎のやつ言葉の選び方考えろよなあ…)」

五月「ですが!!… はあ…」

翼「ごめんね、あいつ俺以外は関わりを持たないからさ」

「代わりと言ってはなんだけど許してやってくれないか？」

五月「いえ！あなたが謝るべきではないですよ…」  
「それよりもあの人のデリカシーの無さは初めてです!!」

「ふん!!」

女子生徒は翼に慰められ少しは冷静になるも風太郎に対しまだ根に持っている。



翼「(やべえどうしよう……なんか別の話題を考えないと……あ、そういえば)」  
「ねえ、その制服うちのとでは違うけどもしかして転校生?」

五月「え? ああそうですけど……」

翼「それにその制服って黒薔薇女子だよね? あのお嬢様学校の」「なんでこの高校に?」

翼は彼女の沸点をなるべく抑えるために別の話題を持ち込んでいく。

五月「ああ……父の転勤がありましたね! それで仕方なくここに来たんです!」

翼「そうなんだね(なんか一瞬暗い顔した? 気のせいかな)」

翼は一瞬彼女の表情に疑問を持つ。

五月「あ! そうです! あなたに教えてもらいたいです!」

翼「え?」

五月「さっきの勉強です! あなたはどうなんですか?」

翼「え、ええーと……まあー英語と数学なら」

五月「そうなんです! 是非教えてください!」

翼「ええ!!」

五月「ダメですか?」

翼「き、急に言われても……」

翼は急な彼女の要望に戸惑ってしまふ。

翼「(…………… 風太郎に強く言えないかもな… 俺もあんまり他の奴とは深く関わりたくない…………)」

「(…………… でも)」

翼「まあ… 時間があつたらな」「(あんな顔されたらな…………)」

翼は戸惑いながらも視線を逸らしながら彼女に言う

五月「ありがとうございます！」

彼女は嬉しそうな顔をした後翼にお礼を言う。

五月「そういえば自己紹介がまだでしたね！私は中野五月と言います。」

翼「あ、ああそういえばそうだったな、如月翼。よろしく」

五月「こちらこそよろしくお願いします(ニコツ)」

お互いに自己紹介した後五月は笑顔で振る舞うが翼は少し苦笑いをする。

風太郎 side

風「関わりすぎたかな…………… まいっか)」

「(どうせもう話すこともない相手だ)」

「(…………… らいはからだ)」

食事を済ませた風太郎は自分の携帯がなっていた事にきずいた。そして誰もバレないようにすぐ様トイレに駆け込み電話をくれたらいい宛に折り返す。

すると

らいは「お兄ちゃん!!お父さんから聞いた!？」

風「ど…どうしたらいいは落ち着いて話してくれ」

らいは「あ、ごめんね」

「うちの借金なくなるかもしれないよ」

風「……………は？」

風太郎は小学生の頃に家族が借金にあつたため返済のために風太郎はバイトをやり続けていた。だがついにそのバイト生活が終止符を打つことになる。妹のらいはから電話越しにそう伝えられる。

らいは「お父さんがいいバイトを見つけてきたんだ。最近引越してきたお金持ちのお家なんだけど、娘さんの家庭教師を探しているんだ」

「アットホームで楽しい現場!相場の5倍のお給料が貰えるって!」

風「……………裏の仕事の匂いしかしらないんだけど…」

らいは「人の腎臓って片方なくなっても大丈夫らしいよ」

風「俺にやれと!？」

「うそうそ、成績が悪くて困ってるって言ってたよ。でもお兄ちゃんならできると信じてる！」

風「ちよつと待て！俺はやるなんて一言も」

「これは「これでお腹いっぱい食べれるようになるね！」

風「……………」

そんな新しいバイトを聞いた風太郎は妹の幸せの為に、もたもたバイトの内容を聞こうとする。

風「…その娘ってどんな奴なんだ？」

「はいは「高校生の人大よ！しかもお兄ちゃんの高校に転入するって言ってたし」

「名前はなんて言ってたっけ……………確か」

午後のホームルーム

五月「中野五月です。どうぞよろしくお願いします。」

風「なっ!!!」

「そう風太郎が教える生徒は食堂で出会った女の子であった。」

生徒A「普通に可愛いじゃん！」

生徒B「あの制服って黒薔薇女子じゃない？」

生徒C 「マジかよ！超金持ちじゃん！」

生徒D 「おいおい、何者だよ」

風 「まさか…… あいつが!? 転校生でお金持ち…… とゆうことは俺はあいつの家庭教師をするのか!?)」

自己紹介をした五月は先生に席の案内をされた後空いている席に向かう。そして風太郎と視線が合い、

風 「ど、どーも」

五月 「ふん」

風 「っ！（ま、まずい……）」

五月は風太郎と目が合うがすぐ様無視し他のクラスの人達と談笑をした。

翼 side

翼 「はあくなんか今日は色々あったな〜」

「風太郎はデリカシー無さすぎ発言するし中野五月と言う女の子も急に勉強教えてくれとか……」

「ほんと…… 色々めんどくせえな……」

翼は今日あった食堂の出来事を思い出し脳を悩ませる。

これからどうしたもんかと考えながら自分の席に座るとクラスの先生が到着しみんなに席を座らせることを促す。

先生「はい座れ、午後のホームルームをする前にみんなから報告があります。」  
「今日からこのクラスに転校生が来るからみんなに紹介するぞー」

翼「転校生か。中野さんか？このクラスに来るのか？」

翼はそう思い今から入ってくる転校生の視線追うため前を向く。

ガラガラガラッ

翼「……………え？」

翼は戸惑った。何故なら入ってきたのは中野五月ではなく彼女とはまた違った雰囲気を持った女の子が入ってきた。

先生「じゃ、自己紹介を」

一花「中野一花です。これからよろしくお願いします（ニコッ）。」

彼女、中野一花は自己紹介をした後 笑顔を見せる。

翼「(は？あの子じゃないのか？転校生もう一人いるってのか？)」

「(しかも中野って… あの子と顔がなんか似てるし、双子か？)」

生徒A「え！めっちゃ可愛いじゃん！」

生徒B「ショートヘアの女の子とか最高！」

生徒C 「しかもあの制服って黒薔薇女子かな？」

生徒D 「え、まじ？じゃあお金持ちとかかな？」

先生 「はいいいお前ら静かにろー」「じゃあ中野さんはあその席、如月の隣の席に座ってくれ」

一花 「分かりました」

中野 一花は先生の言う通りに翼の隣の席に向かう。

一花 「？」

翼 「(やばっ！見てるのばれる！)」

翼は凝視したためか中野一花と一瞬目が合う

一花 「ふふっ、よろしくね？」

翼 「あ、ああ・・・よろしく」

一花 「うん。　ねえさっき私のこと凄く見てたでしょ？」

翼 「いや、見てないけど？」

一花 「嘘？なーんか視線感じたんだよねー(ニヤツ)」

翼 「俺を見ながら言わないでよ」

一花 「あはっ、ごめんごめん。まあでもこれからよろしくね」「名前は如月・・・」

翼 「あ、そうか」「如月翼だこっちこそよろしく」

一花「おっけ、翼君ね。よろしく（ニコツ）」

翼「（なんか調子狂うな。……）」

？「ねえねえ！私になんか用？凄い見てたよね？」

翼「は!?!見てねえし?／＼」

？「そうかなく?なんか視線感じたんだよね（ニヤツ）」

翼「…俺を見ながら言うなよ／＼」

？「あははっ!ごめんごめん、そういえば名前なんだっけ?」

翼「あくそっか、如月翼。あんたは?」

？「私は…」



翼「(あいつと似てるな……… 最初はそんな出会いだっけ……)」

一花「?どうしたの?」

翼「いや、何でもない。」

## 家庭教師として再会

食堂の出来事から翌日

翼「・・・なるほど？つまり中野さんから拒絶されたら家庭教師の仕事が無くなるかもしれないから手伝って欲しいと？」

風「このとおり!!」

翼「ったく・・・あれはお前の発言がなければこんなことにならなかつたんだぞ？」

風「ぐっ！それは分かっている。だがこのままじゃ水の泡だ！お前の力を貸して欲しい!!」

翼「はあ・・・でもどうやってあの子に近づくの？」

風「俺に策がある！」

翼「ほお？」

風「まずお前がうまく誘導し、あいつと同じタイミングで席取ろうとする、そして俺はあいつに向かって『また君と机を並べたくて来てしまったよ。もちろんご飯だけでなく勉強もね!』ってな！」

翼「・・・・・・・・・・なんでお前って勉強以外はバカなんだ？」

風「はあ!？」

翼は風太郎に協力されながらも呆れと不安しかない様子で見守る  
そして風太郎は早速その作戦を実行しようとしたが

風「なっ!友達と食べてる!？」

翼「まじか…:。そんなすぐに仲良くなれるもんなのか?」

なんと五月は4人の女の子と仲良くご飯を食べていた

そして五月は風太郎に気づくと

五月「すみませーん、席は埋まっていますよ? (ニヤツ)」

風「ぐっ! (昨日の仕返しか…:)」

翼「(こりややり返されたな…:)」

五月「あ!如月君じゃないですか!」

翼「お、おう昨日ぶりだな」

五月「ええ、あ!如月君!今日の放課後は予定があるので後日お願いします」

翼「あく時間があつたらね (苦笑)」

五月「ええ!是非お願いします!」

風「なんだ?お前あいつと仲良かったのか?」

翼「まあーそれなりにね」

「頼まれたらきつぱり断れねえな：俺ってお人好しなのかな」

風「とりあえず引き返すぞ。今は厳しすぎる」

風太郎は作戦を諦め引き返そうとした時

一花「あれ？行っちゃうの？」

風「！…そりや…」

翼「あれ？あんた確か」

一花「あれ？翼君じゃん！」

風「なんだ？また知り合いか？」

翼「ああ、同じクラスなんだよ（あの子とは別のクラスだよな？そんなすぐに仲良くなるもんなのか？）」

一花「ねえねえ！二人とも席探してたんでしょ？私達と一緒に食べていけばいいよ」

翼「いや、俺は別に…」

風「食えるか！」

一花「なんで？美少女に囲まれてご飯食べたくないの？」

風「…」

一花「彼女いないのに？」

風「決めつけんな！」

翼「(ふ、風太郎がからかわれている…)」

風「翼、一緒に行くぞ！」

翼「お、おう」

風太郎は一花のからかいに手を焼き諦め帰ろうとした時一花は風太郎の行く先に止まる

一花「まあ待ちなよ。もしかしてき、五月ちゃんが狙いなんですよ？ん？」

風「…別に狙ってる訳じゃ…」

一花「えっ!?本当に五月ちゃんなんだ！」

風「(こいつ…)」

一花「ずばり決めてはなんだったんですか？真面目なところかな？好きそうだもんね」

「あ、そうだ。なんなら私が呼んでき…」

風「待て」

「余計なお世話だ。自分のことは自分でなんとかする」

翼「(あんまり知られたくないもんな…)」

一花「へえーガリ勉のくせに男らしいところあるじゃん！(バンツ)」

風「うっ！」

一花「あでも、困ったらこの一花姉さんに相談するんだぞ。なんか面白そうだし」

風「お姉さんって：： 同学年だろ」

一花「まあそれはそうなんだけど（アハハ）」

「あーじゃあ翼君は？」

翼「お、俺？」

一花「ずばり！翼君も狙ってる女の子がこの中に：：」

翼「いねえよ。だいたい俺はこいつに付き合ってるだけだからな。」

一花「そつかり、あ！じゃあ君！ちよつと翼君借りるね！」

風「は？」

翼「ちよつおい！」

一花は何故か翼の腕を取りさつきまでいた五月達のところに引つ張られる。

翼「おい！何してるんだよ？」

一花「翼君はどの子がいいのかわらなくて！実際に見てもらおうと思います！」

翼「は!?!」

そして翼は一花振り回され五月達のところに混ざり込まれる。

一花「みんなお待たせー！」

二乃「ちよつと！誰よこの人！」

五月「如月君!？」

三玖「五月、知り合いなの?」

五月「ええ、なんで如月君がここに?」

翼「俺が聞きてえ:」

一花「あれ? 四葉は?」

二乃「さつきトイレに行ったわよ」

一花「そつかくー人いないけどじやあ聞いていこう! さあさあ翼君! この中だとタイプはどの子ですか!」

そして一花は翼の好みのタイプを聞く。

翼「いや俺は:」

二乃「ふーん? 悪くないわね。見た目は中の上ね」

五月「なな、何を聞いてるんですか!？」

三玖「一花、凄く楽しんでる」

翼「いやだから: (こいつらの顔: : : : : まさか? てことはじやあ四葉つて子ももしかしたら: : :)」

一花「どうどう? それとも私かな?」

翼「ああそうだな。お前が1番タイプだよ」

一花「え？」

五月「ええええ!!」

三玖「大胆」

二乃「ま、あんた以外の地味男子に選ばれるくらいならまだマシかもね」

翼「何言ってるんだよ。そんな事より、俺まだ飯食べてないしこの後有事あるから」  
そう言つて翼は席が空いてる席がないか探しに行く。

翼「とにかく何とか抜け出せたな……はあ、昨日といい良く巻き込まれるな俺」

「(てか、あいつほんと似てるな……見た目も雰囲気も……性格も)」

一花 s i d e



三玖「行っちゃった…」

二乃「んく見た目は悪くなかったわね。ぶっきらぼうだけど」

五月「二乃は何を言ってるんですか！はあ、一花も如月君に困らせないで…」

一花「……………」

五月「一花？」

一花「え!?何？」

三玖「一花、ブーツとしてた。」

二乃「何放心状態になってるのかしら？」

「もしかして、自分が選ばれると思わなかったから動揺したんじゃない? (ニヤツ)」

三玖「そうなの?」

五月「そうなのですか!」

一花「え、いやーちよつとビックリしただけだよ。翼君もからかい上手いのかもね」

ほんと冗談であって欲しいよア、ハハハハ…」

「(いやいや!!さすがにビックリするって／＼)」

「(……流石に冗談だよね…?)」

風太郎 side

一方の風太郎は一花が翼を引つ張られた後五月とどう接するか悩んでいた

風「しかし困った・・・五月、昨日の件を完全に根に持つてやがる。余計なこと言うんじゃないかった。顔合わせは本日の放課後、時間がない！」

四葉「上杉さん」

風「ん？」

風太郎が食堂の席に座り対策を考えていると今度は頭にリボンを付けた女の子が顔を寄せてきた

風「うわっ！誰!？」

四葉「あはは、やっとこっち見た」

風「!!(あの悪目立ちリボン・・・さっき五月のテーブルで見たぞ・・・とゆうか・・・)」

風「なんで俺の名前をしってるんだ？」

四葉「ふっふっふっ。よくぞ聞いてくれました。私上杉さんにお届け物に参りました。」

そして四葉は2つのテスト用紙を出す

四葉「あなたが落としたのはこの100点のテストですか？それとも0点のテストですか？」

風太郎「(いつの間に…何が目的だ…?)」

「右」

四葉「正直者ですね、両方セットで差し上げます」

風「いらねえよ、誰の点数だよ」

四葉「私のものです(エヘヘ)」

風「よく差上げる気になったな!!」

四葉「それにしても100点なんて初めて見ました、引くほど凄いです」

風「俺は0点を取った奴を初めて見て引いてるよ」

四葉「上杉さんの第一印象は「根暗」「友達がいなさそう」でしたが、新たに「天才」

加えておきますね」

風「全然嬉しくない。それに俺は用事があるから、じゃあな」

風太郎は別の作戦を考えるため翼と合流しようとした

四葉「待つてください!」

風「なんだよ?」

四葉「まだお礼を言われてません」

風「は?」

四葉「落し物を拾ってもらったら『ありがとう』天才なのにそんなことも知らないん

ですか？」

風「(イラッ)」

風太郎は少しイラついたがお礼の変わりに四葉のテスト用紙を当の本人に押し付ける

四葉「え？私の…」

風太郎「たまたま拾った。これで貸し借りなしだな」

四葉「……そっか！ありがとうございます!!」

風太郎「お礼言われちゃったよ」

「あ、そうだ……なあお前……あの……中野五月と仲良いんだろ？俺が謝ってたつてあいつに伝えてくれないか？」

四葉「？よく分かりませんがダメですよ。そう言うことは五月本人に直接言わないと！」

風「そ、そっか……」

そして放課後

翼と合流した風太郎は放課後のタイミングを見計らい五月に会おうとしたのだが翼「なあ風太郎、なんで俺たちこんな恥ずかしいことしてるの？」

風「静かに！」

風太郎は五月と一緒にのタイミングを測ろうとしたがそこには先程の友達が居たため仕方なく？顔はめパネルで隠れていた

翼「なんで俺も一緒にこんなことしなきゃいけないんだよ」

風「それは悪い、でも俺にとって頼れるのはお前しかいない。それになんだかんだ協力してくれるだろ？」

翼「はあ、まあ今日はバイトないし別にいいけど」

風「ありがとう、クソツ帰り道なら1人になると思ったのに……謝るタイミングがねえ……」

二乃「五月食いすぎじゃない？」

五月「そうですか？まだ2個目ですが……」

その時風太郎と五月の視線が合ったように見えた。

風「やべっ！」

二乃「この肉まんお化け！男にモテねーぞー（プニプニ）」

五月「や、やめてください！」

かと思つたら五月は二乃にお腹を揉まれるため風太郎にバレずに済む

五月「わ 私だって昨日男子生徒とランチしたんですからね！」

二乃「あく食堂で会った如月って奴だっけ？勉強の約束もらってるって言う。五月くあいつぶつきらぼうそうだから積極にアピールしないとね？」

五月「どどどどうゆう意味ですか!？」

二乃「もちろん変な意味で」

五月「二乃ー!!」

翼「何を言ってるんだアイツらは…」

風「翼、あいつにそんな約束してたのか？」

翼「まあくなんか流れでそうなっちゃまった」

風「…：…：…：なあ、もし俺があいつに拒絶された場合最悪お前に頼むわ」

翼「はあ!?(小聲)なんでだよ！」

風「最悪の場合だ。それにお前だったら任せられそうだし俺は次のバイトを探すよ」

翼「風太郎…：でもこれはお前の仕事だ。拒絶されたとしてもお前が仕事としてできるまでサポートする。それに…：お前の家庭事情は良く知ってる」

風「翼…：ありがとな」

翼と風太郎のやり取りをしながらも五月達の周りにはなかなか離れない

翼「(食堂の時にも思ったけどやっぱりあいつらって…：)」

風「(横の友達邪魔だな…あれ?もう1人は…)」

三玖「それ、楽しい?」

風「あ」翼「あ」

バレずに済んだと思つたら三玖にはきずかれてしまい三玖は顔はめパネルの目の前に立つ

風「…割とね…こうゆうのが趣味なんだ」

翼「(どうゆう趣味だよ…)」

三玖「ふうん。女子高生を眺める趣味…予備軍…」

風「いや、無言で通報するのやめて?あと友達の五月ちゃんには言うなよ?」

三玖「…分かった。でも、あの子は友達じゃない」

三玖はそう言うのと五月と二乃の所に戻り一緒に帰つて行つた

風「えー…」

「仲良く見えるんだけどな…やっぱり人付き合いってめんどくせーわ」

翼「あ、風太郎その事なんだけど…」

風「クソ、向かうしかねえな(スタスタ)」

翼「おい!待てって!」

風太郎と翼は五月の帰り道に向かっている途中に大きなタワーマンションが見てえ

くるのを目の当たりにし天を見上げる

風「まさか、あそこが五月の家じゃねーだろうな…マジモンの金持ちじゃねーか」

翼「（すげえな… あんなどこ住んでみてえな）」

二乃「なに君達ストーカー？」

風「げっ…」

翼「あ」

二乃「あら、あんた確か如月よね？私達に何か用？用があるならアタシが聞くけど」

翼「（…は正直に言うしかないな…）」

「いや用があるのは五月なんだ。それに俺じゃくてこいつに用が…」

風「お前じゃ話にならない、どいてくれ」

翼「お、おい！」

風太郎は五月と話す為にズカズカと入っていく

それを見た二乃は

二乃「しつこい。如月は兎も角アンタモテないでしょ？」

「早く帰れよ」

翼「（…、怖え）」

二乃は風太郎に対して通行止めし辛辣な発言をする。だが風太郎は

風「帰るも何もここ僕の家ですけど？」



二乃「え!?まじ?ごめん…」

風「全く、失礼な人たちだ」

翼「(普通に嘘ついてる…)」

風太郎は二乃に嘘をつき颯爽とタワーマンションに入ろうとするが

三玖「焼肉定食焼き肉抜き、ダイエット中?」

風 翼「(聞かれてた!)」

二乃「あ!やつばこの住人じゃないわね!警備員さーん!!」

風「クソツ!翼!走るぞ!」

翼「え!?ちよつと待てて!」

三玖に気づかれた風太郎は翼と一緒にダツシユで駆け込む

風「くそつ!なんでこんなことになったんだ」

翼「それはこっちのセリフだ!なんで俺も走んなきゃいけないんだよ!」

風「俺が仕事としてできるまでサポートするって言っただろ?」

翼「あーもう!やつば断れば良かった!」

風「!五月!」

五月はエレベーターに乗り込み風太郎達も必死に追いつき入ろうとしたが  
ガシヤン

風「クソ！階段でいくぞ！」

翼「は!?マジで？」

風「うおおおおお！」

翼「全然話聞いてねえ…」

風太郎と翼は五月のいる階に階段で登っていく

風「(全部あいつのせいだ)」

「(赤の他人に顔色を伺う居心地の悪さも、学校帰りにこんな所で汗だくになって走つてるのも、見透かした眼のあいつに絡まれたのも、単純バカに付き纏われたのも、何を考へてるのか理解不能のアイツに警戒されたのも、正義ヅラしたあいつに因縁をつけられたのも)」

「待て!!」

「(全部… 全部こいつのせいだ!)」

風太郎と翼は五月がいる階に着いたそしてちょうど部屋に入ろうとする五月も2人に気づいた

五月「如月君?!それに…なぜあなたもここにいますか?」

翼「ほら風太郎、まずは謝罪でしょ?」

風「……き…昨日は…わ……悪」

翼「(声ちつちえ...)」

五月「用がないのなら私はこれで」

風「わー！待て待て！」

五月「っ！なんなんですか！何がしたいのですかあなたは？」

「私は今から家庭教師の先生が来てくださるので急いでくだ...」

風「それ俺」

五月「.....はい？」

風「家庭教師、俺」

五月「ガーーーーーガーーーーン」

「だ、断固拒否します！」

風「俺だつて嫌だ！俺の方が嫌だね！」

「だが諦める訳にもいかない、昨日のことは全面的に俺が悪かった！謝る！」

「今日から俺が、お前のパートナーだ!!」

五月は風太郎を拒絶するも風太郎は諦めず、これからの家庭教師だと言いつける

五月「そんな...無理...こんな人が...」

「私達の家庭教師だなんて」

風「!? 私たち？」

翼「あくやっぱそうなんだな……」

風「翼？一体どうゆう……」

風太郎はどゆうことなのかを翼に聞こうとした時、1個のエレベーターのドアが開く。そしてその中から出てきのは……

一花「あれ？優等生くんと翼君じゃん！五月ちゃんとは何してたの？」

二乃「いた！こいつらがストーカーよ！」

四葉「ええ！上杉さんが？この方もストーカーなんですか？」

三玖「二乃、早とちりしすぎ」

風「は？なんでこいつらがここにいるんだ……」

五月「なんでって……住んでるからに決まってるじゃないですか」

風「へへえ……同級生の友達五人でシェアハウスか。仲がいいんだな」

翼「シェアハウスならこんなとこ住まねえだろ……」

この時風太郎は脳を急激にフル回転し一つの答えを導き出した。だが風太郎は信じたくなかった。

これは夢だ。夢に違いない

五月「違います私たち」

「五つ子の姉妹です」

時は7年後

？「夢のような日ってふふっ風太郎と翼が私たちに出会った日でしょ？」

「一花、二乃、三玖、四葉、五月、五つ子だとそこで知ったんだよね」

「夢のようだなって見えなかったけど」

風「そうだね」

俺はあの瞬間が大人になってからも夢に見る

とんでもない悪夢だ

## 五人の問題児

「はいは「お兄ちゃん今頃家庭教師頑張ってるかなー。よし！今日は奮発しておかずに卵焼き作っちゃお！」

「はいはは風太郎の仕事の頑張りを楽しみにしつつ夜ご飯を作っている。だが当の本人はただ今苦戦中である」

風太郎 and 翼 side

翼「しかしまさかほんとに五つ子だったなんてな…流石の風太郎でもこれは苦戦し  
そうだな…」

四葉「そうですねーまさかお二人がストーカーだったなんて…」

翼「独り言を言った傍から四葉が入ってくる」

翼「何しれつと入ってきてデマを信じちゃってるの？」

四葉「ええ!!嘘なんですか!？」

翼「はあ…確かに家までついて行ったのはほんとだけどそれは五月と風太郎がちやんと話せる機会が欲しかったんだ。」

「そんで俺はそのサポートをしただけ」

四葉「そ、そうだったんですね。すみません勘違いしちゃって（アハハ…）」

「そういえばまだ初めましてでしたね！私は中野四葉です！」

翼「あくそういえばそうだったな、如月翼。よろしくね」

四葉「はい！これから家庭教師よろしくお願いします！」

翼「？俺は家庭教師やらんど？」

四葉「ええ！？そうなんですか！？サポートって言ってたのでてつきり家庭教師なのかと！！」

翼「もしかしたらまだ色々勘違いされてるかもな…。」

そして風太郎は五つ子のお父さんに改めて仕事の確認をし電話をかけている

風「五つ子！？な… 中野さん… 娘さん達が五つ子というのはホントなんですか？」

中野父『ああ、彼女達は正真正銘の一卵性の五つ子だ。君には卒業まで導いてやって欲しい。』

風「そ… それはちよつと自信ないかな… とか言つて」

中野父『それなら、サポートメンバーに手伝ってもらうのも結構だよ』

風「？それはどうゆう？」

中野父『私の運転手から聞いてね。五女の五月君が君以外に教えて貰おうとしている人がいると聞いた。』

風「まさか……翼の事か？」

中野父『その人と一緒にやっついていくのも構わない。それでも難しいなら君のお父さんに押し切られてしまった件だが仕方がない。この話は無かったことに……』

風「いえ！自信がみなぎってきました！」

「娘さん全員を無事卒業させてみせます!!」

中野父『期待しているよ。そのサポートの子もやることになったらその子にも報酬は5人分払おう。所で娘達はそこでしているのかい？』

中野父からそう聞かれた風太郎。実際は誰もリビングにはいなく勉強所ではなくなっていた。

中野父『どうかしたかい？』

風「ま、全く問題ありませんよ！おいおい、押すんじゃないよ。全く困った生徒たちだ！したら僕はこの辺で……」

中野父『ああ、頑張ってくれたまえ』

ピッ

中野父「しかし、江端から聞いたサポートの子、如月……どこかで……」



風太郎は中野父を何とか誤魔化し切り替えようとする。

風「はあ：：： あいつら：：： 一体どこに：：：」

四葉「みんな自分の部屋に戻りましたよ」

翼「こりや大変なことになったな」

風太郎の独り言を言ったそばから四葉と翼が話しかけに来た。

風「ああ、ほんとだよ。それで：：： 四葉：：： だっけ？ 0点の：：：」

四葉「えへへ：：： お父さんとは話せましたか？」

風「ああ、お前らが本当に：：： なあ眉間に皺を寄せてみてくれ」

四葉「？こ、こうですか？」

四葉は風太郎に頼まれると眉間に皺を寄せて風太郎に見せる

風「ほんとに五つ子なんだな：：： ってかなんでお前は逃げないの？」

四葉「し、心外です！上杉さんの授業を受けるために決まってるじゃないですか」

上杉「！」

四葉「怖い先生が来るかと思って嫌だったんですが、同級生の上杉さんとなら楽しそうです！」

上杉「四葉。抱きしめていいか？」

翼「何サラッとセクハラ発言言ってるの？」

四葉「さー他のみんなを呼びに行きましょー！」

翼「ま、1人は協力的にはなったな。じゃ、俺の仕事はもう終わりだから今日はここで休暇にするよ」

翼は風太郎の状況を見てなんとかなると判断し颯爽と帰宅するところだったが：

ガシツ

風太郎は翼の肩を掴む

翼「な、何？どうした風太郎」

風「お前は今日から正式にこの仕事を受けてもらう」

翼「は!?!お前サポートのことはさっき下で話したばっかだろ？」

風「その事なただけだな。実は…」

風太郎は翼に中野父から正式に翼にも働いて良い許可を得た事、報酬の事、など詳しい事情を説明した。

翼「う、嘘だろ……」

「つまり、俺は正式にここで働く事になったのか？」

風「ああ、もちろんバイトがある日は仕方がないが基本的には俺と一緒にやってもらう」

翼「お、お前な……」

風「さすがの俺でも五人相手は厳しいからな、頼むよ」

翼「はあ……なんでこんなことに……」（トホホ）

風太郎は少し笑顔で翼に協力をお願いする

翼「…… わかつてると思うけど、俺はそんな勉強得意じゃねえぞ？」

風「大丈夫だ。一緒に手伝って貰えるだけで充分だ」

翼「…… まあ、やれるだけやってみるよ……」

風「ああ、ありがとな。」

四葉「よし！じゃ早速みんなを呼びに行きましょう！」

風太郎と翼と四葉は残り4人を集めるためそれぞれの部屋に着く

四葉「手前から五月、私、三玖、二乃、そして一花ですな」

風「まさか五人から集めるところから始めるとはな……」

四葉「大丈夫ですって、クラスが一緒なら知ってると思いますですが五月は凄く真面目な子です。余程事がない限り協力してくれますよ！」

四葉は五月に勉強を誘うが

五月「嫌です」

四葉「あれー」

五月「そもそもなぜ同級生のあなたなのですか？この町にはまともな家庭教師は一人

もないのでしょうか」

「それに、あなたに教えて貰うなら如月君に教えてもらいたいです。」

翼「まあまあ五月、俺はあくまでサポートだからさ（アハハ）」

五月「如月君…ですが…」

風「そうだ、それに昨日は俺に勉強教えて欲しいって言ってたじゃん」

五月「！ 気の迷いです！忘れてください！」

バタン！

五月に勉強を誘うが当の本人は拒否しドアを強く閉める

風「…」

翼「こりや… 先が思いやられるな…」

四葉「あはは、五人もいれば1人くらいこうなりますよ」

「次いきましよう、三玖は私たちの中で1番頭が良いんです。上杉さんと気が合うんじゃないかなー」

3人は三玖の部屋に向かう

三玖「嫌」

四葉「あれれー」

三玖「なんで同級生のあなたなの？この町にはまともな家庭教…」

風「分かった！さっきもそれ聞いたそれ！」

三玖も五月と同意見で勉強を拒否する

翼「こいつら今日家庭教師来るの知ってるんだよな？」

四葉「つ、次いきましよう！、二乃は人付き合いがとてもし上手なんです。たくさんのお友達がいるので上杉さんもすぐに仲良くなれますよ」

そして二乃の部屋に向かうが

風「部屋にもいないってどうゆう事!？」

翼「どっか逃げたのかな？」

風「自信なくなってきた・・・」

四葉「大丈夫です！まだ一花が残ってます！一花は……………」

風「何その間!!」

四葉「その…驚かさないでくださいね？」

翼「?それってどうゆう…」

そして一花の部屋を開けた途端

翼「こ、これは強烈だな……………」

風「ここに人が住んでるのか？」

一花の部屋は他の4人と比べてゴミ屋敷の用になっていた

一花「人の部屋を未開の地位にして欲しくないなあ」

「ふあくおはよ、まだ帰つてなかつたんだね」

四葉「もく……この前片付けたばかりなのに」

風「足の踏み場もねえ……」

翼「よくこんなところで寝れるもんだな」

一花「もくツバサ君も酷いことゆうなく」

「まさかフータロー君達が私たちの先生とわねくそれで五月ちゃんを見てた訳だ」

翼「俺はさつき聞かされたけどな」

一花「そうなんだ？でもお友達の協力はするんだね？」

翼「風太郎じゃなかったら俺はこんな仕事やらねえ」

一花「でも五月ちゃん勉強も見てくれるんでしょ？」

翼「知ってんのかよ……」

一花「これでもお姉ちゃんなんでね」

風「そんなことはいいいからとりあえず居間に戻るぞ」

風太郎は翼と一花の会話を遮り一花を連れ戻そうとした

一花「あーダメダメ、服着てないから照れる」

風「なんでだよ！／＼」

四葉「あわわわわ!!」

一花が服を来ていないとわかった途端風太郎は慌てて四葉は風太郎の顔を抑える

一花「ほら私って寝る時基本裸じゃん? あ、シヨーツは穿いてるから安心して」

翼「いや上も着ろよ」

一花「こうした方が寝る時開放感あるんだよ。あれー脱いだ服どこだ? 四葉そこら辺にある服適当にちょうだい」

翼「寝る前提かよ……お前って意外と怠惰だな」

一花「むう、ツバサ君って結構冷たい事言うよね(ムス?)」

翼「ホントの事言っただけだ。」

一花「そんなこと言って、せっかく同級生の女の子部屋に来たのに、それでいいの? (ニヤツ)」

四葉「いい一花!」

一花は翼を誘うかのように揶揄う

翼「(こいつ……食堂の時と言い面倒くせえ、こうなったら……)」

「じゃあ、何をしたって良いって事だな？」

一花「えっ!?!／／」

翼はそう言い一花の所に近づくと掛け布団に手をかけ剥ごうとしようとした。

一花「ちよつちよつと!!／／／何してんの!?!」

翼「なんだ? お前から誘ってきたんだ。だったらそれに答えなきやいけないよな?」

四葉「如月さん!?!それはちよつとやばいですよ!!」

風「翼!?!お前何しよう!?!」

一花「そ、それは:／／いや:。なんて言うか:。その:／／」

これには一花でも困惑してしまい四葉は慌ててふためき風太郎は四葉に顔を抑えられてる為何が起こっているのか分からなかった

翼「(つたく:。やっぱその反応になるか)」

そして翼は足元にあつた一花の部屋着を取り

それを一花に投げ渡す



一花「え?… ツバサ君?」

翼「男は何仕出かすか分からないからな。俺で良かったものの他の奴だったら襲われてるからな?」

一花「えっ?… うん」

翼「分かつたらさっさと着替えて居間に来い」

翼はそう言うで一花の部屋から出ていく

四葉「い、良いんですか?」

翼「うん、もし来なかったとしてもまた呼べば良いよ」

スタスタ

四葉「上杉さん」

上杉「なんだ?」

四葉「如月さんってぶつきらぼうなんですか?二乃とか三玖はそう言うてたんですが、私にはそんな風には見えないんですが?」

風「まあ仕事だからそうやってるんじゃないか?」

四葉「んーそうなんですかねー」

一花「(はあくびづくりした)。てゆうか食堂の時もそうだけどツバサ君って予測つ

かないな……」

翼「なんだ？お前から誘ってきたんだ。だったらそれに答えなきやいけないよな？」

一花「ホントに襲われるかと思うじゃん」「ムスー」／／／

翼「あれぐらいしないと自覚が持たねえからな……」

一花「そんなこと言って、せっかく同級生の女の子部屋に来たのに、それでいいの？  
(ニヤツ)」

翼「(つたく、： アイツ、ホント自覚もてよな(ムカツ)／／／)」

三玖「ツバサ？」

翼「！……えつと……三玖だっけ？」

三玖「うん。どうしたの？顔真っ赤だけど」

翼「いや！／＼。なんでもない！それよりどした？なにか用か？」

三玖「うん。ツバサ、聞きたいことがあるの」

翼「？」

三玖「私の体操服がなくなったの、赤のジャージ」

翼「そうか」

三玖「さつきまでであったの、ツバサが来る前はね。盗…」

翼「つてない!!」

四葉「三玖、どうしたの？」

三玖「四葉、私の体操服知らない？」

四葉「いや？見てないけど」

風「どうした？みんなして」

四葉「三玖の体操服がないんです、上杉さん知りませんか？」

三玖「まさか…盗…」

風「つてない!!」

三玖は体操服をないことに翼と風太郎を怪しむ

翼「もつと探してみたら？」

三玖「ありそうなどころは一通り調べた。残るは…」

そうゆうと三玖は一花の部屋を指さす

翼「じ、冗談じゃねえ…」

風「そんなことしたら日が暮れちまう」

そう思った時、その部屋で着替え終わった一花のナイスアイデアが飛ぶ。

一花「前の高校のジャージでいいんじゃない？」

風「ナイスアイデア！」

三玖「あんな学校の体操服なんて捨てた」

風「もったいないな！転校前の学校になんの恨みがあるんだよ！」

風太郎がそう言うのと三玖は急に黙り込んでしまう

風「え？」

翼「どうしたの？」

一花「あんなことがあつたらね…」

三玖「知らない方がいい。少なくともフータローとツバサは」

風「俺関係ないだろ…っ！か興味ないし…」

四葉「……」

翼「四葉？どうかしたか？」

四葉「え!?!ええ！なんでもありません！」

翼「そ、そうか」

翼は少し表情が曇っていた四葉を気にかけてたが本人は問題ないと言う。すると

二乃「おい。そこで何やってんの〜？」

風、翼「！」

二乃「クッキー作りすぎちゃった、食べる？」

何故か二乃が下のキツチンでクツキーを多めに作っていてみんなを誘おうとする。

三玖「二乃、今はそれどころじゃ」

四葉「あ、あのジャージって…」

三玖「私のジャージ（ムスー）」

二乃の羽織っている服をよく見ると三玖のジャージだと気づく。そして五月以外の4人をなんとか部屋からリビングに出す事ができた。

風「よしこれで四人だ。五月はいないが始めてしまおう。まずは実力を測るためにも小テストをしよう！」

四人「いただきまーす!!」

いざ勉強を始めようとしたら四人は二乃の作ったクツキーでお菓子パーティーを始めました。

三玖「なんで私のジャージ着てたの？」

二乃「えー？だつて料理で汚れたら嫌じゃん」

三玖「今すぐ脱いで」

二乃「ちよ！やめて！」

翼「誰もやる気ねえな…」

風「クツ……」

四葉「上杉さんご心配なく！私はもう始めてます！」

風「よーし！名前しか書けてないがいいぞ！」

一花「……」

四葉「一花？どうしたの？」

一花「！、いや！なんでもないよ（アハハ）」

「（あーもう／＼さっきのがフラッシュバックする／＼）」

二乃と三玖が痴話喧嘩し四葉は勉強に取り組んでる所。一花はお菓子を食べるが先程の翼との部屋の一件で思い出しで赤面する。

風「お前らも勉強するぞ」

三玖「勉強するなんて言ってるじゃない」

風「三玖！体操服も見つかったんだからやつまでくれよ」

二乃「ねーねー、せっかくの土曜日だし遊びに行かない？」

風「絶対ダメ!!」

一花「んーでも食べたら眠くなってきたかも」

風「さつきまで寝てたろ！」

「(こいつら・・・どうしようもねえ・・・)」

風太郎が勉強を始めようとするも二乃、三玖、一花は未だに拒む。

翼「まあまあ三人とも。そしたら、このパーティーが済んだら勉強するって事で良い？」

風「翼・・・」

三玖「だから私は勉強するなんて・・・」

二乃「別に良いわよ」

一花「二乃？」

二乃「せっかく作ったんだし食べなきゃもったいわよ。あんた達も一緒に食べてくれたら勉強してもいいよ」

翼「(小声) 風太郎、これで大丈夫か？」

風太郎「(小声) すまない、助かった」

翼の提案で勉強の約束をもらい風太郎は翼に感謝すると同時に安堵する。

翼「(・・・) だが意外だな。あんなに俺達を毛嫌いしていた二乃が賛成するとは・・・)」

二乃「クツキー嫌い？」

翼「いや、そんなことはないぞ」

二乃「なら一緒に食べましょ♪」

翼「お、おう（なんか態度も変わってるよな？）」

二乃「あんたも食べないの？」

風「いや・・・そうゆう気分じゃ・・・」

二乃「警戒しなくてもクツキーに薬なんでもってないわよ」

翼「（いや危なすぎだろ・・・ほんとに盛らねえよな？）」

風「（さっきとは打って変わって、こいつ何を企んでやがる・・・）」

翼が二乃の警戒心を伺いつつ風太郎も同様に二乃に対して警戒するも二人ともパー

ティーに参加する

二乃「うわっモリモリ減ってる！そんなに美味しい？」

風「あ、ああ美味しいな・・・」

二乃「如月はどう？美味しい？」

翼「ああ、美味いぞ」

二乃「やった！作ったかいがあるわ。あ、そうだ」

「パパとどんな約束したの？」



風 翼「！」

クツキーを食べてる途中、二乃が父とどんな話をしたのか問だし風太郎と翼は困惑する

風「特に何も…」

二乃「うつそー君ってこんなことするキャラじゃないでしょ。如月は何か聞いてないの？」

翼「あー俺はサポートだし今日知らされたからあんま分らないんだよね」

「(ここで報酬のこととかバレたら尚更…)いつらに拒絶されるだろうな…。どうしようか…」

風太郎が困惑してる間翼はどう乗り切ろうか考えてる時二乃が本音を言い放つ

二乃「そっかそっか、まあでもぶつちやけ家庭教師なんていらなんだよね」

二乃の発言により風太郎と翼はともかく他の三人も静かになった。

二乃「なーんてね。はい、二人ともお水」

風「お、おう…。サンキュ…」

翼「俺は飲み物持ってきてるから大丈夫だよ」

二乃「…。そ、そう。ま、喉が渴いたら飲みなさい」

翼「?おう(なんだ?今の反応)」

翼はお水を拒んだ時二乃の反応が違和感を覚えた。

風「ゴクゴク…（結局五月は部屋から出てこなかったな…だがここからだ。五人を卒業させるしか俺には道がない!）」

風太郎は心の中で覚悟を決めコップを置いたその時  
フラッ

風「あ…れ…?」

ガタッ!!

翼「!?風太郎!」

二乃「あー、結構効きすぎちゃったわね」

四葉「上杉さん!?!どうしちゃたんですか?」

三玖「二乃?何をしたの?」

二乃「別に?ただ寝てもらっただけよ」

翼「!」

---

二乃「警戒しなくてもクッキーに薬なんでもってないわよ」

---

翼「(まさか、睡眠薬!?)」



二乃「あんたみたいな家庭教師じゃない奴ができないわよね。さっさと出ていったら？」

五月「どうしたのですか？」

風太郎が倒れ姉妹たちが言い争ってる中、五月が部屋から出てきてリビングに降りてきた。

二乃「あ、五月ーあんたの邪魔者はもう大丈夫よー」

五月「これは!?何があつたんですか？」

三玖「二乃がフータローを寝かせた。」

五月「さ、流石にやりすぎですよ!それに如月君も困って…」

四葉「如月さん？」

三玖「ツバサ？」

姉妹たちは翼の方に目を向くと

翼「……ハア……ハア」

一花「ツバサ君?大丈夫？」

翼「!!」

翼は呼吸が荒くなっていたが一花の気にかけて目が覚める

翼「…… い……ちか……」

一花「大丈夫？」

翼「…… ああ。」

翼は一花に返答すると、今度は二乃の方に向き

二乃「な、何よ」

翼「……風太郎に……何をした？」

二乃「は？なんでそんなこと言わ」

翼「何をしたって聞いてんだよ（ドスドス）」

二乃「ヒッ！」

翼は怒りの顔を滲ませながら二乃に近づいていく

五月「き、如月君！落ち着いて下さい！」

四葉「だ、ダメですよ！喧嘩は！」

翼「俺は落ち着いてる。あいつに何をしたのか吐かせるんだよ。」

二乃「な、なんでそんなこと言わなきや」

翼（睨）ギロツ」

二乃「ヒッ！」

翼は頭は冷静になっているが感情は上がっている一方だ

翼 「風太郎に何した!!そんで謝れ!じゃねえと力づくでも」

四葉 「ダ、ダメですよ!暴力反対です!」

五月 「そうです!ほんとに落ち着いてください!」

四葉と五月は翼を止め落ち着かせる

翼 「俺は落ち着いてる!!」

三玖 「二乃!何したのか言つて!」

二乃 「な、なんでよ!」

三玖 「元は二乃がやった事!早く!じゃないとツバサが… 迫ってくる…」

「そう言うのと三玖は両足が震え少し涙目になっている

二乃 「わ、私は… あんた達を守るために…」

翼 「守る為ならなんだってやっていいのかよ!!」

二乃 「う、うるさい!だいたい私は家庭教師なんかいらぬし、頼んでないわよ!」

翼 「!… ふざけんな… そんなことで… もう許さねえ!!」

四葉 「如月さん!」

五月 「如月君!」

翼は四葉と五月の制止を払い二乃に迫ろうとした時

一花 「やめて!!!」

一花以外「!!!」

一花の大きな声が聞こえみんながびっくりする

一花「もうやめよ?…二人とも」

二乃「でも!」

一花「二乃。流石にやりすぎだよ。二乃の気持ちも分かるけど、一緒に謝ろ?」

二乃「……」

翼「一花……」

一花「翼君も。そんな顔したら誰だつて怖がるよ、冷静になる?」

一花は二人を冷静と落ち着きを取り戻させていく

翼「ああ…すまなかつた」

一花「ほら、二乃も」

二乃「……悪かつたわよ」

翼は礼をするも、二乃はそっぽ向きつつ言う。

翼「すう……はー……よし、今日は帰る」

四葉「え?もうですか?」

翼「ああ、風太郎がこんなじや話にならんからな。どつかの誰かさんのせいで(ジ

トー)」

二乃「わ、悪かったわよ！」

翼は多少の落ち着きを取り戻しつつもまだ二乃の事はゆるしてはいないようだ。

そして翼は風太郎の腕を肩にかけて帰ろうとした時

翼「よっこいしょと！そんなじゃあな」

五月「待つてください！」

翼「？なんだ？」

翼「手伝います。いいえ、手伝わしてください！」

翼「え？いや、俺一人で大丈夫……」

五月「そうじゃないです！元々は私達がご迷惑をおかけした事です、せめて償わせてください」

一花「私もいいかな？」

翼「え？一花も？」

一花「流石に翼君一人でも重たいでしょ？」

翼「（まあ……確かに少し重いけど）でもお前らがやる事でもな……」

五月「お願いします！」

翼は断ろうとするが五月の圧にやられてしまう

翼「つあく分かったよ。じゃあもう肩の方お願いしてもいい？」



五月「はい！」

一花「おっけー、みんなはお留守番ね！」

四葉「はいい！」

三玖「分かった」

二乃「……」

そして翼と五月と一花そして睡眠中の風太郎は部屋から出て風太郎の家に送り迎える

三玖「行っちゃった」

四葉「いやー、一時はどうなるかと思ったよ（アハハ）」

二乃「……」

三玖「二乃、まだ怒ってる？」

二乃「怒ってない！怒ってないけど……私は、家庭教師なんかいらぬ」

三玖「それは私も同意見。でも流石にやりすぎ」

二乃「分かっているわよ！でも……あいつらは……あたし達の邪魔者よ」

四葉「んー私はみんなが楽しければそれでいいと思うんだけどな」

三玖「四葉は楽しそうだね」

四葉「うん！だって上杉さんと如月さんなら、なんとかかなりそうだもん！」

二乃「何の自信よそれ……私は絶対無理!!」

三玖「私もそう思う。(…そうだよ、どうせ無理だよ……特に私なんか…)」

## それぞれの家族

翼、五月、一花はお眠り中の風太郎を連れて家までタクシーで送り迎えし風太郎の家に着く。

運転手「お客さん着きましたよ」

風「!!えっ?」

翼「お、やっと起きたな」

風「翼!?ここはどこだ?」

翼「お前ん家だよ」

風「は!?!」

風太郎はタクシーの窓越しから辺りを見回す。

風「なぜ...」

一花「乗る前からぐーっすり寝てたからね」

風「一花!?なんでお前も」

一花「私は君を手伝ってここに來てるの。もう結構重かったからね」

翼「お前は対して運んでないからそんな重くなかっただろ」

一花「か弱い女の子は限界だったんだよ」

翼「自分で言うな」

翼と一花の痴話喧嘩をしている時風太郎はここに行き着くまで必死に遡る。

風「運んだ?? そういえばあん時確か……そうだ! あの時水を飲んだら……あの

野郎……そこまでするか……」

翼「ほんとだよなく、ぜってえ許さねえ……(イライラ)」

一花「ほらほら、また怖い顔してるよ。」

三人でやりとりしてる中タクシーの運転手が割り込んで入る

運転手「お客さん、割り込み失礼しますが、運賃4800円になります。」

風「え!?金!?タ、タクシー高っ!そんな大金……」

風太郎は交通費のお金で慌てていると助手席の方から

五月「カードで」

風「!」

運転手「まいど」

風「五月!」

助手席に乗った五月がカードで支払ってもらうことに

風「お前もいたのか……」

五月「私はいいでです。あなたが私達の家で寝てもらっては困りますからね。」

一花「おやおやく？ほんとには迷惑かけちゃったから償わせてくって言つてなかつたわけ？」

五月「き、気のせいです！／＼」

翼「思いつきり俺に言つたじゃん…」

一花と翼は五月に対しからかいやツツコミを入れると五月は話を戻す。

五月「コホン、とにかく。あなたに居座られるのは困ります。住所は如月君から聞きました」

風「そつか、そういうえばお前は知ってるのか」

翼「まあね、小学校以来だからうる覚えだったけど当たつてよかつたわ」

翼と風太郎は小学校の時に知り合い、何かお互いの家に遊びに来ていた。

五月「それにしても、一泡吹かされましたね。これに懲りないのなら私たちの家庭教師は諦めることです。」

風「いや、それは出来ない」

五月「何故そこまで…」

すると家からびよこつとらしいはが出てくる。

らしいは「あれ！お兄ちゃんだ！」

風「ら、らいは！」

らいは「?もしかして翼さん!?お久しぶりです！」

翼「らいはか!久しぶりだね!元気にしてた?’

らいは「うん!」

翼はらいはちゃんとは小学校から仲良くしてもらい、風太郎がいない時は一緒に遊んでいた。

そしてらいははその向こう側の五月を見ると

らいは「まさか翼さんが来てるなんて!!今日はお兄ちゃんと一緒だったんですか?’

翼「まあね、ちよつと色々あったけど」

らいは「そうなんだー。あれ?もしかしてその人って!」

風「!!な、なんでもない人だ!帰るぞ!」

らいは「嘘!あの人が生徒さんでしょ!」

五月「?’

らいはに見られた五月はキョトンとするがらいはは仲を深めたいのか五月に対して

らいは「良かったらウチでご飯食べて行きませんか?’

五月「え!?’

風「いや!それは……ほら!な!?!このお姉さん忙しいから!」

「らしいは「そんな……嫌……ですか？」

五月「ハッ!!!／＼」

五月は少し涙目のらしいはに対して断ることができなくなってしまう。

らしいは「もう一人のお姉さんもどうですか？翼さんも食べますか？」

翼「ごめんな。お母さんが夜ご飯作って待っててくれるから行けないや」

らしいは「そつかく（シユン）」

一花「私も妹達が待っているから、ごめんね？」

らしいは「そうですかく」

五月「い、一花！私も……」

一花「五月ちゃんも食べに行つて大丈夫だよ。それにあんな可愛い女の子が作ったご飯食べてみたいでしょ？」

五月「うっ!!それは……そうですが……」

翼「それはそうなんだ……」

一花「後で二乃達に言つとくから、行つてきな。」

五月「うう……ありがとうございます（ペコリ）」

そうして五月は風太郎の家でご飯を食べ、一花と翼はタクシーで帰りに向かう。

勇也「まさか風太郎が女の子を連れてくる日が来るとはな！ガハハハ!!」

家では風太郎と五月とらいは、そして風太郎の父、勇也が夕飯をとっていた。

勇也「お？この牛乳消費期限が一週間前じゃねえか。危うく飲めなくなるところだったぜ（ゴクゴク）」

風「親父……」

五月「あ……」

勇也の行動に風太郎は「やめてくれ」と言わんばかりの顔をし、五月は愕然とする

風「（くそ……こいつだけには知られたくなかった……）」

らいは「もうすぐできるからね〜お兄ちゃんが予定よりも早く帰ってきて間に合ってたよ」

らいは「ちゃんと家庭教師できた？」

風 五月「!!」

夜ご飯を作ってくれてる中らいは家庭教師について触れだす

五月「その件についてですが……」

風「もちろんバッチグーよ!!」

五月は正直に話そうとしたが風太郎に遮られてしまう

五月「な！何を」



風「(小声) いいからー！ らいはが悲しむー！」

らいは「そうなんだ！ 安心したよー！」

「これで借金問題も解決だねー！」

五月「(え？….)」

風「！… らいは、お客さんの前だぞ」

らいは「あ、ごめん…。」

そしてらいはは上杉家特製の料理を持ってくる

らいは「はい、上杉家特製カレーと卵焼きです！ お口に合うといいんだけど」

風「ふん、お嬢様に庶民の味がわかるかね」

らいは「こら(ペシツ)」

らいはは風太郎の余計な一言に対しておぼんで頭を引っぱたく

風「痛って!!」

らいは「そういう嫌味なところ直した方がいいよ」

五月「…。」

上杉家と五月はご飯を一緒に食べ、五月は帰りの支度をする。

五月「今日はご馳走様でした(ペコリ)」

勇也「おう、風太郎、通りまで送って行ってやんな」

風「えー：。」

らしいは「五月さん」

五月「？なんですか？」

らしいは「お兄ちゃんはクズで：。自己中な最低の人間だけど：。」

風「おい」

らしいは「でも、良いところもいっぱいあるんだ！」

風「！」

らしいは「だから：。その：。また食べに来てくれる？」

その問いに五月は

五月「もちろん。頭を使うとお腹が空きますから、またご馳走してください」

五月はらしいはに対し笑顔でそう答える

そして帰り道で五月はタクシーを待っていて風太郎は送り迎えをしてる時

五月「勘違いしないでください。今日二乃が仕出した事は謝ります。そしてあなたの事情は察しがつきました。それでも協力は出来ません。」

風「そうかよ、別にお前が気にすることじゃない」

五月「勉強はしますが教えはこいません。あなたの手を借りずともやり遂げてみせます。」

風「あつそ……!!そうか……それでいいのか!条件は卒業だけなんだ!五月サイコー!」

五月「??え?な、なんのつもりですか?」

風「いいアイデアがある。明日同じ時間にまた行く。ほかの四人を集めてくれ」

翼 side

一花「五月ちゃん楽しんでるかな」

翼「何呑気な事言ってるんだよ」

一方翼と一花は一緒のタクシーでそれぞれの家に向かっている

翼「にしても、風太郎の家懐かしいな」

一花「ねえ、風太郎君の家ってあんな感じなんだね?優等生だからもつと大きい所かと思っただけど、意外とこじんまりしてるっていうか」

翼「ま、人は見かけによらずだしな」

一花「ふーん?なんか知ってる素振りだね?」翼「まあな、小学校からの付き合いだからな」

「(あいつの家庭事情は俺が一番知ってる)」

翼は風太郎の家庭事情を知っているため五つ子にはまだ秘密にしていると一花から

一花「そういえば翼君ってこちら辺に住んでるの？」

翼「？まあそうだな。」

一花「へえ、翼君の家も見てみたいな（ニコ）」

翼「別に大した大きさはねえよ」

そんな会話をしてる時翼の家に到着しタクシーから下りる

翼「よし、着いたな」

一花「お！どれどれ？翼君の家は？お！一般の一軒家だね」

翼「な？対して変わらないだろ？」

一花「まあ、風太郎君と比べるとね」

そんな会話していると如月家から誰か出てきた

如月母「あら？翼おかえり」

翼「あ！母さんただいま。夕ご飯できてる？」

如月母「もう出来てるわよ。帰り遅くなつたね？」

翼「まあ、色々諸事情ありまして（ハハハ）」

如月母「もう、バイトだったらあんまり遅くまでやらないでね？」

翼「大丈夫だよ、子供じゃないんだから」

如月母「あら？そちらの女の子は……！」

一花「？」

如月母は一花の方を見ると少し驚いた顔をする

一花「あの……何か……」

如月母「！いえ、なんでもないわ……翼、その子は？」

翼「ただの知り合い、昨日転校して来てたまたま一緒になった。」

一花「（ムー）なんか失礼な言い方だな」

翼「実際合ってるだろ」

そう聞くと母は少し落ち着きを取り戻す

如月母「そ、そうだったのね……名前はなんて言うの？」

一花「は、はい！中野一花です。よろしくお願ひします」

如月母「そう、一花ちゃんね。翼のことこれからよろしくね？」

一花「はい！翼君は私が面倒みます！（フン）」

翼「お前は俺の姉じゃねえだろ」

一花「え？でも実際お姉さんだもん」

一花と翼のやりとりを見てると如月のお母さんはいつも通りのにこやかな表情に戻

る

如月母「フフ（ニコツ）」

翼「?どうしたの? 母さん」

如月母「いいえ、翼と一花ちゃん仲良いんだな〜って」

翼「そうか?」

一花「お!これはあれじゃない?おしどり夫婦って奴?」

翼「調子に乗るな（コン）」

翼はそう言うのと一花の頭にチョップする

一花「痛!もう何するのさ!」

如月母「フフ、あなた達面白いわね。あ!一花ちゃん、夜遅いし家でご飯食べに行

く?」

一花「え!」

翼「母さん!」

如月母「せっかくお友達が来たんだもん。夜ご飯もできてるし上がってきたな?」

翼「いや!友達じゃなくてただの知り合い!.. じゃなくて!ほら!.. 一花は忙しいし

さ!ね?」

一花「私はいいよ?」

翼「は!?!お前何言ってるの?」

一花「私は全然大丈夫だよ。後で四葉達に言っとくよ。それに翼君のお家の中とかすぐく気になるからなく(ニヤツ)」

一花はそう言いながら翼にニヤつき顔を見せる

翼「こ、こいつ…(イラッ)」

如月母「さあさあ上がってきて!」

一花「ありがとうございます!」

如月母 一花「♪」

如月母と一花はルンルン気分で家に入っていく

翼「なんか似てるな……」

そして如月母と翼そして一花で夜ご飯を共にとっていた

如月母「今日はカレーよ!さあ食べて食べて!」

一花「ハアアー!いただきます!」

翼「(よりによつてコイツが入るのかよ…ハアアー)」

そしてその後は基本一花とお母さんで会話が盛り上がった。今日の学校の事や姉妹達の事など。

ただ家庭教師の事は一花は乗り気ではない為話していない。

如月母「嘘！五つ子なの！？それでお姉ちゃんなんだ？すっかりしてるわねー」

一花「いえいえ、そんなことないですよ」

翼「そうだぞ。こいつ家では部屋が痛たたた！」

一花が翼の腕をつねる

一花「（小声）ちよつと！／＼今何言おうとしたの？」

翼「（小声）何ってお前の部屋の現状を言おうとした所だぞ？」

一花「（小声）だからって今言うタイミングじゃないでしょ！」

如月母「部屋がどうしたの？」

一花「あく、私の部屋がすごい整理整頓されてるって言おうとしたんですよ！（ア

ハハ）」

翼「（知られたくないならキレイにしろよ……）」

一花は何とか誤魔化していこうとするが

如月母「そうだったのね。なるほどなるほど……？てことは翼は一花ちゃんの部

屋に入ったって事なのよね？」

翼「ん？まあそうなるな」

如月母「へえ？翼が女の子の部屋入ったんだ？そんなに仲良くなってるのね？（二

ヤツ）」



翼「別にそんなんじゃないって」

如月母「またまた、で？部屋で一花ちゃんと何か遊んだの？ゲームとか？」

翼「別になんもして…」

一花「そんなこと言って、せっかくの同級生の女の子の部屋に来たのに、それでいいの？（ニヤツ）」

翼「なんだ？お前から誘ってきたんだ。だったらそれに答えなきゃいけないよな？」

翼「っ／／／／」 一花「ん／／／／」

一花と翼、それぞれ今日の部屋の出来事を思い出す

如月母「どうしたの？そんな赤くして。もしかして大人の段階登って何かしたのかな？（ニヤツ）」

翼「してねえ！／／／」 一花「してません！／／／」

なんやかんやあって一花は帰りの支度をし帰宅する所になる

一花「今日はありがとうございました！」

如月母「いいのよ、また来てちょうだい」

一花「はい！」

翼「別に来なくて良いって」

如月母「コラ、そんな事言わないの ペシッ」

如月のお母さんは翼の頭を引っぱたく

翼「痛！」

如月母「ほら、送り迎えしなさい」

翼「ええ〜」

そう言うが半ば無理矢理母に押され翼はタクシー乗りの所まで一花を送り届ける

一花「ありがとね。家に招き入れてくれて」

翼「別に、母さんが無理言って入れたようなもんだろ」

一花「確かに」

翼「……こっちこそありがとな」

一花「え？」

翼「あん時、お前が止めなかったら多分二乃に手を出してたかもしんねえ」

一花「あくあの時か、いいよ。冷静になつてくれればそれで良かったから。流石の私でも度が超えてたと思つたけど」

翼「… やっぱ家庭教師はいらねえか？」

一花「だつて、勉強するなら他の事もつとやりたいじゃん？ほら、恋とか！」

翼「……………」

一花「翼君？」

翼「…恋とか…しない方がいいだろ」

一花「え？」

翼の目や表情は明らかに曇つていた

翼「お？タクシー来たんじゃね？」

一花「え、あ、ホントだ」

翼「それじゃあな」

一花「う、うん」

翼はタクシーが来たと見たらすぐに家に戻つた

一花はタクシーに乗るとさつき翼の表情をみて

一花「さつきの表情… なんだつたんだろう…」

如月母「おかえり、ちゃんと送り迎えできた？」

翼「大丈夫だよ。さつきタクシーで帰ったから」

如月母「楽しかったね？久しぶりにお友達が家に来て」

翼「……まあ、な。」

如月母「……やっぱりまだあの子は忘れてないんだね？」

翼「……忘れないよ、絶対に」

そう言い翼は自分の部屋に入っていく

その時母は今日の翼と一花のやりとりを振り返り独り言する。

如月母「一花ちゃん、あの子に似てるものね……」

「もし……翼があの際に戻れるなら……一花ちゃんが変わってくれるかもね……」

## 屋上の告白

中野姉妹とのドタバタ事件から翌日

中野姉妹と翼は風太郎に呼び出され姉妹達の家にいる。

風「昨日の悪行は心優しい俺がギリギリゆるすでしょう。今日はよく集まってくれた  
！」

四葉「まあ私たちの家ですし」

三玖「まだ諦めてなかったんだ」

五月「……」

一花「(zzzz)」

翼「なんでこいつは寝てんだよ」

四葉「いつものことなので」

二乃「それより友達と遊ぶ予定だったんだけど？家庭教師はいらなくて言っ  
てな  
か  
っ  
た  
っ  
け  
？

翼「(睨)」

二乃「！」

二乃が反対の声を上げると翼は状況反射で二乃を睨む  
四「き、如月さん！ダメですよ！」

翼「大丈夫だ。昨日の事はもうしないよ」

二乃「フン！どうだか」

翼「あ？（イラッ）」

五月「ダメですー！」

翼は昨日の件もあって、二乃に対してまだイラつきがあり四葉と五月でなだめる

風「翼、俺のことはもういいから」

翼「でも…」

風「大丈夫だ。　だったら二乃、それを証明してくれ」

二乃「し、証明？」

風太郎は二乃にそう言うところある物を取り出す

風「昨日出来なかったテストだ。合格ラインを超えた奴には金輪際近づかないと約束しよう」

風、一花以外「!!」

風「勝手に卒業していってくれ」

翼は風太郎に近づき小声で耳打ちする

翼「(小声) おい風太郎!俺らはこいつらの家庭教師だろ?どうゆうつもりだ?」

風「(小声) この仕事の目的はこいつら全員を卒業させること。つまり、馬鹿正直に五人全員を相手する必要なんでない!」

翼「!(小声) つまり: : 赤点候補だけ教えれば良いってことか?」

風「(小声) その通り!」

翼「(小声) なるほど: :」

風太郎と翼のコソコソ話をしていると

二乃「なーに二人でコソコソしてるのよ。てゆうか、なんでアタシがそんなめんどいなことしなきゃ: :」

五月「分かりました。受けましょう」

風太郎の提案に五月は乗っかってきた

二乃「は?五月、あんた本気?」

五月「合格すればいいんです。これであなたの顔を見なくて済みます。」

五月は風太郎に対して睨み続ける

一花「ふあ: : とうゆうことならやりますか」

翼「あ、やっど起きた」

一花「フッフ、話は聞かせてもらいましたよ」

翼「寝た奴のセリフじゃないだろ」

四「アハハ、よし！みんな！頑張ろ！」

四葉の掛け声により姉妹達それぞれペンを取り出していく。

三「合格ラインは？」

風「60…いや50点あればそれでいい」

二「はあ…別に受ける義理はないんだけど。あんまりアタシたちを侮らないでよね」

姉妹達はテストを行いそして風太郎と翼で採点をしていく。

翼「こ、これは！」

風「採点終わったぞ！凄え！100点だ！」

「全員合わせてな!!」

テスト結果を見ると全員目標点数とは程遠い結果になっていた。

翼「あ、頭が痛くなってきた…」

風「お前ら…まさか…」



二乃「逃げろ！」

風「あ!! 待て！」

翼「なんで四葉も逃げんの!？」

テスト結果がバレると姉妹達はすぐに部屋に逃げ込む

四葉「あはは、なんか前の学校思い出すね」

一花「厳しいとこだったもんねー」

三玖「思い出したくもない」

五月「おかしい・・・勉強したはずなのに・・・」

二乃「あいつら知ってんのかな・・・」

「私たちが落第しかけて転校してきたって」

そして風太郎と翼は心の中で息ぴったりに揃う

風 翼「(こいつら・・・五人揃って赤点候補かよ)」

翌日の朝

風「ハア、ハア」

翼「大丈夫か？夏バテか？」

風「いや、大丈夫だ」

「(家庭教師と自分の勉強の両立がこんなにきついとは…こんな生活続けられるのか？)」

翼「なあ風太郎」

風「？なんだ？」

翼「まあー一応俺もいるからさ困ったことあったらいつでも言ってくれよ？」

「(いくら風太郎でもあの姉妹達に対応するのはきついだろうしな…)」

風「ありがとな」

翼「サポートだから当たり前だろ」

ブオオオ

翼「？なんだ？」

風太郎と翼が話していると後ろから黒いリムジンが後ろから走ってきてそのまま校門の前に止まる

風「おおっ!!見たことも無い外国の車だ！カッケー！100万はするだろうな」

翼「ゼロ一個足んねえよ」

風「は!? そんなバカな!!」

翼「(こいつ… ほんと勉強以外はバカだな)」

そしてしばらくすると車の中から二人が見知っている姉妹達が現れた

一花「あ! 風太郎君に翼君!」

四葉「お二人共おはようございます!」

五月「上杉くん、あんまりジロジロ見ないでください、不躰な」

翼「(五月は風太郎に対して相変わらずか…)」

風「お前ら、昨日は良くも逃げて… っておい! また!」

風太郎が昨日のことを話すと姉妹達は逃げて行く

風「よく見ろ! 俺は手ぶらだ! 何も持っていない!」

姉妹達「…」

二乃「騙されないわよ」

一花「参考書とか隠してない?」

三玖「油断させて勉強教えてくるかも」

風「(こいつら… 俺をなんだと思ってるんだ…)」

翼「(警戒心強すぎだろ…)」

そんな中五月は翼に近づき小声で話す

五月「(小聲) 如月君」

翼「?(小聲) なんだ?」

五月「一昨日、上杉君の家に来た時、彼の事情を察しました。」

翼「!(小聲) そうか...」

五月「(小聲) 彼は妹さん、そして家族のためにやってる。如月君は知っていたんですよね?」

五月は風太郎の事情について翼に聞く

翼「(小聲) まあ、幼い頃からの仲だからな。あいつの家に遊びに行つた時から、あの家はずつと変わつてない」

五月「(小聲) そうなんですな...」

翼「(小聲) まあ五月、この事は...」

五月「(小聲) もちろん言いませんよ。でも... だとしても、彼に教えを乞うのは結構。私自身で解決します。」

翼「(小聲) アハハ汗、風太郎に対しては厳しいね。五月は」

五月「当たり前です!あの人はデリカシーがなさすぎます」

翼「まああいつはそうかもね。でもあいつは誰よりも真つ直ぐなやつだから思つてる程嫌な奴じゃないと思うよ?」

五月「私には……そうは見えないです……上杉君より、如月君の方がよっぽど……」  
翼「そんな事ない。そんな事……」

五月「？如月君？」

五月は翼の表情を見ると少し曇っていた

風「お前ら、何話してるんだ？」

五月「な、なんでもありません！それより私は貴方に言いました。自分の問題は自分で片付けます」

風「そうか、じゃあ昨日のテストの復習は当然したよな！」

五月「(ビクッ！)」

姉妹達「……」

風太郎の間に姉妹達は黙ってしまふ

風「問一」

敵島の戦いで毛利元就が破った武将を答えよ」

翼「(それって昨日のテストの問題……)」

姉妹達「……」

風 翼「(無言……!!)」

この数日間で分かった事がある。

この五人は勉強嫌いだ、

そして……俺らに対し距離感がある

風「クソ、1人ずつ信頼関係を築くところからしかないのか……俺の最も苦手な分野だ……それなら」

翼「翼に頼もうってか？」

風「翼！」

教室に着く合間に風太郎が頭を悩ませていると翼が寄ってきた。

翼「いくらでも頼ってくれ。お前1人で五人相手とか無理ゲーだろ」

風「ありがとう。それなら……？」

翼「どうした？風太郎」

風「なあ翼、これを見てくれ」

風太郎はそう言うのと昨日のテストの結果を見せてきた

翼「昨日のテストだよな？それがどうかしたか？」

風「問題は1問目だ」

翼「1問目？えっと……これって」

風「ああ、三玖のやつ昨日のテストの1問目正解してるんだ」

翼「じゃあなんで今日は答えなかったんだ？」

風「……探ってみるか」

翼「そうだな」

昼食

食堂に來た風太郎と翼は三玖に接触しにくく

風「よ、よう三玖」

翼「(小声)ぎこちねえぞ(ジト)」

風「(小声)うるせえ！」

風太郎のぎこちなさに翼は小声で突っ込む

三玖「何？フータロー、ツバサ……」

翼「?どうした？」

三玖「え、えつと……」

三玖は翼を見ると少しオドオドしていた

翼「(あくもしかして二乃の件で怖がらせたか……)」

翼「この前はごめんね?もう大丈夫だから」

三玖「え？」

翼「一昨日の事は血が上ってたけど、もう冷静だからさ。(まあ……完全に許してはな  
いが……)」

三玖「ほ、ほんと？」

翼「ほんと」

三玖「そっか……ホッ」

風「翼、三玖になんかしたのか？」

翼「まあうちよつとねアハハ……」

風太郎に問われた翼は苦笑いをする

そして風太郎は視線を三玖が頼んだメニューに映す

風「ふーん……。？350円のサンドイッチに……なんだ、その飲み物」

三「抹茶ソーダ」

風「逆に味が気になる！」

三「いじわるするフータローにはあげない」

風「いじわるって……(いらないけど……)」

「(やっぱりこいつは何考えてるのかわかんねえ)」

風太郎に対し冷たい行動をとる三玖は話を変える



三「そういえば、何か用？」

風「あ、ああ。一つ聞いていいか？今朝の問題のことなんだが……」

三「！」

そういうと背後から聞き覚えのある声之急に出てきた

四「上杉さん！お昼一緒に食べませんか？」

風「うおっ！」

翼「ビックリした！」

四「如月さんも！一緒に食べませんか？」

風「なんだ四葉か、お前はいつも突然なんだよ」

四「あはは、朝は逃げちやつてすみません」

一「やつほー。2人とも三玖と一緒にだったんだね」

翼「なんだ、一花もいたのか」

一「ブーおまけみたいに言わないでよ」

翼「別に言っていないだろ……」

一花は頬を膨らまし翼を睨む

そして四葉は思い出したかのようにあるものを出す

四「そういえばこれ見てください！英語の宿題です！全部間違えてました！あははは

は！」

翼「なんで嬉しそうなんだよ…」

一「四葉邪魔しないの、ごめんね？邪魔しちゃって」

そう言つて一花は四葉と一緒に立ち去ろうとする

四「一花も見てもらおうよ」

一「うーん、私はパスかな」

「私たちバカだし、ね？」

風「だからって…」

一「それにさ、高校生生活勉強だけってどうなの？」

「もつと青春をエンジョイしようよ！恋とか！」

翼「だから恋なんか…」

風「！恋だと？」

翼「あ、やべ」

一花の発言に対し風太郎は反論する

風「アレは学業から最もかけ離れた愚かな行為だ。したい奴はすればいい…だがそい

つの人生のピークは学生時代となるだろう」

一「この拗らせ方手遅れだわ…！」

翼 「俺は兎も角こいつの前で恋など言うところなるんだ」

四 「あはは…恋愛したくても相手がいらないんですけどね。三玖はどう？」  
「好きな男子とかできた？」

三 「えっ…いい、いないよ！ タタタ…」

三玖はそう言うのと顔を少し赤くし立ち去る

風 「？急にどうしたんだ…」

翼 「あいつ…まさか…」

四 「如月さん、そのまさかだと思えます！」

風 「は？どうゆう事だよ」

四 「あの表情、姉妹の私なら尚更分かります」

「三玖は恋をしています…」

風 「……」

風太郎 side

風 「（三玖に好きな人だと…？四葉の思い過ぎならいいが…もしそうだとしたら良くない流れだ。あいつらには勉強してもらわないと困るのにな…）」

如月達と解散し教室に戻る風太郎は自分の席に座ろうとすると

風「!なんだ?」

机の中手を入れるとそこには風太郎宛の手紙が書いてあった

「フータローへ。三玖

昼休みに屋上来て、フータローに伝えたいことがある。どうしてもこの気持ちが抑えられないの。」

風「(俺かよ!!いや待つて、三玖が俺を?まだ会つて3日ですけど!?)」

五月「何ニヤついているんですか?気持ち悪いですよ」

風「ば…っ!ニヤついてねーし!真顔過ぎるほど真顔だ!」

五月「?」

丁度通りかかった五月にバレないように風太郎はなんとか誤魔化す

風「(これはイタズラ!!クールになれ上杉風太郎こんなことにわざわざ付き合つてやる必要はない!)」

---

屋上

そんな風太郎だが結局屋上で待つことにする

風「(ほらな!程度の低いイタズラに乗つかつてしまったぜ。まあ本来に來られても困るんだが…)」

風太郎は腕組みしながら待つも来る気配がないため教室に戻ろうとした時  
ガチャ

三玖「…」

風「み、三玖…!!イタズラじゃないのか?」

三玖「良かった。手紙見てくれたんだ」

風「(…ま、まずい…) お、俺ら来年受験なんだし…」

三玖「本当は食堂で言えたら良かったんだけど」

「誰にも聞かれなくなかったから」

風「(あれ?…雰囲気やばくない?)」

四「あの表情、姉妹の私なら尚更分かります」

「三玖は恋をしています!」

風「(四葉の台詞がフラッシュユバックしてるし!)」

三玖「ずっと言いたかったの」

「す」「す」

「陶晴賢」